

**漢字は原始的な文字で、最も非能率的な文字で、できる限り廃棄すべきものではないか。**

東大名誉教授倉石武四郎氏は、「漢字の運命」という本を書かれ、漢字は早晩この世から消えゆく運命にある“古い”非能率的な文字であると断じています。氏は、漢字を原始的な表意文字とし、それに代わるべき文字は“表音文字”であるとしています。しかし、この考え方は、古く西欧の言語学者の発想であり、わが国の言語学者の多くは、それに追随しているように思われます。

しかし、私はこう考えています。

漢字は、従来、表意文字という名で呼ばれています。たとえば、ムーア = ハウスは、「言葉に関係なく、物事を直接に表わすものとして誕生した文字だ。」と語っています。

私は、すぐに消えてしまい、遠くに届けることのできない“言葉”を、時間的にも空間的にもその効用を拡大するために創作したものが“文字”であり、したがって、「文字は、本質的に“言語”に対応して作られたものである。」と考えます。したがって、それは“表意文字”ではなくて、“音声”と、“意味”との融合である“言葉”を表わした文字、つまり“表語

文字”と呼ぶべき文字だと考えます。

ムーア = ハウスは、表意文字は初め音声言語に全く無関係に存在したと言っています。長い間に、それに対応する言葉の“音声”がその文字にまわりつき、ついで、逆に意味を捨てて“表音文字”を作り出した、と言っています。つまり、表意文字を表音文字に作り変えたことを、文字の進化と考えているのです。

しかし、漢字を、表意文字ではなくて、表音兼表意の“表語文字”だと考えますと、“表音文字”はその輝きを失ってしまいます。

事実、世界の文字の中で、最もすぐれた文字であると言われてきたローマ字も、その発生を調べてみますと、そんなに輝かしいものではなかったのです。ローマ字が、象形文字から生まれたことは確かですが、表音文字になったことは、ムーア = ハウスの言うようには進歩でも発展でもありませんでした。

文字をもたない民族が、先進国の文字を取り入れる時、必然的にそれは“表音文字”となるのです。

“表語文字”の“表意性”を捨てて、“表音性”に頼ることだけが、外国の文字を借りて、自国語を表わすために許された最も簡便な方法なのです。

たとえば、わが国は、初め、漢字の“意”を捨てて、“音”だけを借りて、国語を表わしました。これが“万葉がな”です。“波”の“なみ”の意味を捨てて“は”という音だけを借りたのです。

アルファベットの誕生も全く同じです。

A は、アレフという「牛」の意味の象形文字でした。Aを逆にして、それに目を入れれば ∇ となり、牛の頭を象った文字であることがよくわかります。

この「牛」という意味を捨てて、アレフの「ア」という音だけを借りたのが、現在のアルファベットなのです。

ついでに言いますと、B は、ベートという「家」の意味の象形字です。

B を横にして、∞ とすれば、家の並んだ形になり、家を表わす表語文字であることがわかると思います。

これも、「家」という意味を捨てて、ベートの「b」という音を表わすものとして、今の用法が生まれたのです。

それは、文字をもたない民族が、他国の文字を借り入れる時に必然的に起こる、やむをえない表記法であって、ムーア = ハウスたちが礼賛するように、これを“文字の発展”と見ることは、とても無理です。

漢字を原始的な文字だと言うのはよろしい。しかし、“表語文字”は、原始的にして、同時に最も理想的な文字なのです。だから、中国では、五千年の間、原始のままの用法を維持して変わらなかったのです。(中



漢字は表語文字で最も



理想的なすぐれた文字である

共では、一時、表音化を目指しましたが、その不可なることをさとり中止しました。)

表音文字は、表語文字の代用品です。借り物の悲しさで、表音という手段を借り、言葉のもつ意味を表わすよりほかに方法がなかったのです。だから、表音とはいえ、表意性を尊び、今の西欧の諸国語は、実際は“表語文字”化しつつあるのです。

{	so	{	saw
	sow		soar
	sew		sore

これらは、代用品である表音文字で、表語性を求めた結果の所産です。表音文字は、こうなって初めて、文字の効用を高度に発揮できるのです。

ところが、ムーア = ハウスは、これを表音文字の“後退”と呼びました。それは、表音文字を表意文字(実は表語文字)よりもすぐれた文字であると考えるところから生ずる当然の考え方と言えましょう。

昭和41年、来日した、アメリカ最高の言語学者と言われるノアム = チョムスキー氏は、「朝日ジャーナル」誌の座談会で、“表音文字による表音的表記法”を、「それは、意味を理解しようがしまいが、聞いたことを

ただ再生するためにできていると言えるでしょう。」(「朝日ジャーナル」vol. 8 No. 40 より)と言っているのは、“表音文字”に対する従来の評価を180度転回させたものだと思います。

彼は、日本の漢字かな交り文について、「日本語の事情についてはよく知りませんが……」と断わって「漢字かな交りの文字体系は、世間で最も良い表記法かもしれないと思います。」と言っているのは、決してお世辞ではありません。

チョムスキーは、「文字に対する考え方は、西欧ではこの十年間に180度の転回をした。」と言っていますが、私たちも、ムーア = ハウス流の古い考え方から、一日も早く脱却しなくてはならないと思います。